

グローバルセンターの設置と めざすもの

— 地球規模の視野、足元の実践 —

山田 修平 (Syuhei YAMADA)

学校法人藤田学院
鳥取看護大学・鳥取短期大学 理事長

一眼は遠く歴史の彼方を、そして一眼は脚下の実践へ¹⁾

森信三先生²⁾の言葉である。広い世界的視野に立ち、歴史の大流を受け止め、独創的な哲学体系・「全一学」を創設された。他方、至難なことであるが、人はそれぞれ主体的に生きなければならない。唯一の秘訣は腰骨を立て姿勢を正すこと。なぜなら心身は不可分であるからと具体的な提唱、指導をされると共に、足元の紙屑はサラリと拾い、受け取った手紙の返事は即座に書かれた森先生の思想と生き方が端的に示されている³⁾。

世界は空間的な広がり、歴史は時間的な流れ、この2つの交錯する処、時に私たちはいる。「この場」、「いま」の生き様、活動の在り方が問われる。

Glocal : Think globally, act locally

奇を衒（てら）うわけではない。グローバル (Glocal) は、全世界的な広がりグローバリゼーション (globalization: 世界普遍化) と、地域の特色や特性を考慮していく流れであるローカリゼーション (localization: 地域化) の2語の混成語である。意図するところは、「地球規模で考え、自分の足元、地域で活動する」ことである。森先生の言葉、そして実践と軌を一にする。

今、私たちの生活は

人、金銭、もの、情報等が国境を越え行き交う時代、企業にしろ、個人にしろ、海外との行き来は日常化している。とはいえ足元を固めず、地球規模に活動するだけでは、根無し草になりがちである。他方、どの地方に生活していても、グローバル化とは無関係では有り得ない。

地方創生は、わが国の再生のキーワードである。少子高齢化が進行している。とりわけ地方は深刻である。出生率の低下と若者の都会転出が重なり、人口は減少し、高齢化は急速に進んでいる。人口の流出を食い止め、出生率を上げるために、子育て環境の充実を前提としつつ、様々な方策が各地域で打ち出されている。地場産業の復興、観光の振興、農業の6次産業化、若者の起業の支援など。

その発想は、世界の潮流を見極めつつ、あるものをより特性化し、必要な連携をしつつ、魅力ある地域づくりをとっているというのである。

卑近な例を示そう。鳥取県は山、海、砂丘、湖、川、そして何気ない田畑、野原等も含め自然環境は素晴らしい。とりわけ私たちの大学が位置する中部圏域は日本の故郷と呼ぶにふさわしい、豊かな自然に文化、歴史が溶け込んだ、田園文化地域である。人情味も豊かである。この地で、ウォーキングを通じて、人々の健康づくり、地域活性化をしようと始めたSun-In 未来ウォーク。私が大会長を務めている。2018（平成30）年6月で18回目になる。当初、鳥取県中部のローカルな大会であったが、やがて南は沖縄から、北は北海道まで各地から多くの人々が参加する全国規模の大会となった。さらに毎年、韓国から、またインド、中国からも参加する大会になった。レストランの三つ星にあたる日本マーチングリーグ認定の大会に育った。そして2015（平成27）年にはアジアトレイルズカンファレンス（ATC）、2016（平成28）年にはワールドトレイルズカンファレンス（WTC）をこの鳥取県中部で行う牽引力、土台となる大会に育った。

ウォーキングを通じて、多くの国々の人々と交流することになった。ウォーキングの仕方にも、またウォーキング大会を通じて地域を活性化する方法にも、様々な取組みがあることを学んだ。韓国のチェジュ島の路地歩き。何気ない街角を地元の住民とおしゃべり、食べながら楽しむ歩き方。他方WTCの会長である南アフリカのガレイ氏はロングトレイルコースを提唱。要は山道、土の道を自然と同化する本格的トレッキングのためのコースである。どれも魅力的である。鳥取県の特性を最大限生かして、世界各国の方にそれぞれに楽しんでいただける選択できるコースを設定した。倉吉や湯梨浜の路地の食べ歩きのコース、大山、三朝の山中、琴浦、岩美の海岸沿い、世界の視点から見直したら、鳥取県には素晴らしいところはいっぱいである。少しテコ入れをすればよいだけである。そして世界20数か国から来訪されたウォーカーとの交流を楽しむことができた。さらにイベントだけではなく、鳥取県中部圏域を健康的な保養地にしようとウォーキングリゾート構想が示され、その実現に向けて動き出した。

なにもウォーキングだけではない。グローバルな視点と地域での実践は欠かせない。とりわけ地方の大学の在り方においては、である。

建学理念の具体化とその広がり

鳥取女子短期大学は、1971（昭和46）年に地元の教育界、経済界、社会団体等の強い要請を受けて設立された。建学の理念は、設立の経緯からも「地域に有為な人材を育む」、「地域貢献」、「地域と共に」である。その後、2001（平成13）年に男女共学となり鳥取短期大学となった。これも地域の強い要請によるものである。そして2015（平成27）年、鳥取看護大学が、鳥取短期大学を受け皿にして設立された。鳥取県、倉吉市等の地元自治体、鳥取県看護連盟、各種社会団体、地元経済界の強い要請と支援によるものである。当然、その建学の理念も、鳥取女子短期大学と一貫して同じである。私立大学であるが、地域立、コミュニティカレッジである。

当然、地域貢献は、教育、研究を基盤に行う。鳥取短期大学の学生の70%以上は、鳥取県出身、そして他の多くは島根県出身である。彼らはこの倉吉のキャンパスで学び、そしてほとんどが出身の山陰両県の各地域で就職し、福祉、教育、食物、農業、情報、文化、建築、金融、自治体等様々な分野で活躍している。その数、12,000名を超える。卒業生たちは鳥取県、そして地域活性化の重要な担い手である。教員の研究活動も、地場の食材、鳥取県の教育、福祉、山間地域の再生、山陰の方言等地域に係るものが多い。そうした知見を有した多くの教員が地元自治体の様々な審議会等の委員を務め、講演もしてきた。地域のオピニオンリーダーとしての役割である。

個々の教員の地域貢献・交流にとどまらず、大学の機関としての地域交流、推進の場として、2007（平成19）年、地域交流センターを設置し、講師・委員依頼の窓口、地域イベントへのボランティア

の派遣、公開講座の開催、広報紙・年報『地域交流』を発刊した。

他方、1994（平成6）年4月、日本文化学科（現国際文化交流学科）設置と合わせ、北東アジア文化総合研究所を開設した。日本文化の理解には、北東アジアとの交流の歴史を遡らなければ語れないからである。同研究所は、北東アジア地域の自然、文化、歴史、政治、経済等に関する研究と直接当該地域との交流を行い、その成果を研究雑誌『北東アジア文化研究』に発表してきた。短期大学レベルでは、全国でも特徴的な研究所として一定の評価を得てきた。

鳥取看護大学は、4年制大学としては珍しく、短期大学と同じく学生の70～80%は鳥取県出身であり、他のほとんどは島根県出身である。まだ4年目を迎えるところで卒業生は出していないが、それぞれが地元で医療、看護、福祉分野に就職すると期待される。また鳥取看護大学は開設の2015（平成27）年、あるいはその前年より、「まちの保健室」で地域に教職員、学生が出向き、地域の人々の健康診断、健康相談を行った。この活動の輪は瞬く間に県内全域に広がり、その指導者養成の「まめんなかえ師範塾」も開設され、多くの修了生を地域社会に送り出している。さらにアジアで最も歴史の古いフィリピンの名門サント・トマス大学と学術協定を結ぶ等、海外交流も活発に行い、活動範囲も拡大してきた。

2つの機関の発展的統合

北東アジア地域という限定を広げる必要がある。地域との交流、地域活動もグローバルな視点を持たなければならぬ。時代の潮流を一層キャッチする必要がある。北東アジア文化総合研究所と地域交流センターの培ってきた活動実績、機能を発展的に統合し、2017（平成29）年4月、グローバルセンターを設置した。グローバルとローカルの統合である。

教員のセンター長、事務職の副センター長、兼担としているが実質専任の研究員、事務職3名（兼務1名含む）、「まちの保健室」コーディネーター1名、加えて兼担研究員を鳥取看護大学教員より2名、鳥取短期大学教員より3名配置した。

部門として海外研究・交流部門、地域研究・教育・交流部門、自治体・産業・企業および教育機関等連携部門、「まちの保健室」研究・教育部門を設けた。この4部門に2018（平成30）年度よりは、「とっとりプラットフォーム5+α」、「ブランディング研究」等、新たな事業の所掌としての役割を担うことにもなる。当然スタッフも増員する。ただ機能的に部門別としているが、何れも「グローバル」の理念を基底においての活動であることは銘記したい。

その象徴が本年報『グローバル』である。研究雑誌『北東アジア文化研究』と年報『地域交流』を統合し、活動報告、情報提供と共に論文も掲載できる年報を目指したい。グローバルセンター設置から1年、年報『グローバル』の創刊号である。まだまだ内容的には物足りなさがあるかもしれない。お許しいただきたい。グローバルセンターの活動の充実、進化と共に、『グローバル』も読みごたえのあるものになるであろう。

おわりに

鳥取看護大学、鳥取短期大学共に地方の小さな大学である。しかし視野は地球規模、歴史の大流を確固と受け止め、足元はしっかり地域に置き、地域の特性を生かし、地域に真に貢献する大学でありたい。その推進役がグローバルセンターであり、その活動のエッセンスを本年報『グローバル』でお伝えできればと思う。「地球規模の視野、足元の実践」である。

《参考文献・注》

- 1) 寺田清一編『森信三先生 一日一語』実践人の家、1991年12月、p.202、「12月2日の言葉」
- 2) 1896（明治29）年、愛知県生まれ。京都帝国大学哲学科卒、建国大学教授、神戸大学教授等歴任。膨大な著作があるが、『森信三全集』全25巻（実践社、1965～1968年）、『森信三全集続篇』全8巻（実践の家、1982～1984年）に収録されている。1992（平成4）年逝去。享年97歳。森信三先生の経歴、思想と学問体系そして実践は3）～5）に詳しい。
- 3) 山田修平「森信三の全一学と実践（1）（2）（3）（4）（5）」『鳥取短期大学研究紀要』第62号（2010年12月）・第63号（2011年6月）・第64号（2011年12月）・第65号（2012年6月）・第66号（2012年12月）
- 4) 山田修平「補論：森信三の全一学と実践」『鳥取短期大学研究紀要』第67号（2013年6月）
- 5) 山田修平「森信三の日本文化論（1）（2）」『鳥取短期大学研究紀要』第71号（2015年6月）・第72号（2015年12月）